新たな体験活動に関わる手引き

1　体験活動を行うための基本的な考え方

(1)「新たな体験活動」は従来の宿泊学習等と同じように学校行事として実施する。
　従って、活動にかかる経費や組織については学校側の計画とする。

(2)「新たな体験活動」単独の事業（例えば日帰りでの体験）として実施することや、今までの宿泊体験活動の中に「新たな体験活動」を加えるなど柔軟な考え方で対応可。

(3)「新たな体験活動」は子どもの自主性、主体性を生かした活動をめざす。

2　学校（教師）の基本的な役割

(1) 体験活動の目的設定

・教育課程の位置付け

・活動目的の設定（教師と子どもが共通理解）

(2) 活動を実施するための組織作り

・特に、活動当日の子どものサポート体制を意識した組織
　（保護者や地域の方々、関係機関等の協力など）

・安全の確保最優先（緊急時の連絡方法の確認）

(3) 活動するための留意事項

・子どもの自主性、主体性をできるだけ尊重する。
　時間数や活動範囲、体験の種類、安全の確保などの関係で、ある程度の制約することも必要である。

・行動単位の決定
　グループ活動を基本とする（受入れ側の要望）。

・事業実施に係る経費
　保護者の負担を考えると、今までの宿泊学習と同程度が良いのか？
　体験活動や交通手段の活用にかかる経費の許容範囲（子どもが持参する金額）

・体験活動を行う範囲の決定
　子どもの活動の掌握や安全を考慮すると活動できる範囲を決めた方が良い。
　※体験活動の行動範囲を広くすれば掌握が難しくなる。

・子ども中心のグループ行動なので、体験の種類や数は無理のない程度
　活動開始から終了（集合場所）までの時間を設定し、無理のない体験数（２～３種類か？）
　昼食を体験活動とすることも考えられる。（活動計画の中に含む）

・交通手段として徒歩、循環バス、タクシーなど

(4) 活動のまとめと発表会の設定

・一グループの体験数が少ない（２～３）ため、他のグループの体験内容を把握することでクラス全体の内容を共有することができる。

3　子どもの活動

（1）基本的にはグループ活動（５～６人位か？）

（2）活動種類は目的に沿った、提示された中から選択が基本

（3）体験する場所との交渉、連絡、調整（内容、料金、予約など）

子どもが体験場所と連絡を取る際は、その前か後に教師側のフォローが必要か

（4）グループの行動計画の作成（１日の行程表、交通手段、予算、役割分担など）

（5）活動内容の記録、写真等での記録、配布された資料の整備、感想などをもとに活動後にグループの発表会を実施（各グループ２～３種類の体験しかしないので、他のグループの発表によって体験活動を共有する）

（6）可能であればグループに一台タブレットを持参（記録、非常連絡、様々な検索など）

4　新たな体験活動実行委員会（仮称）の役割

（NPO 法人ひと・まちねっとわーく、水戸市生涯学習課、水戸市総合教育研究所）

（1）　新たな体験活動を実行するための条件整備やアドバイス、サポートを行う。

（2）　体験当日のサポート

（3）　体験活動を実施する学校や関係団体との調整、体験場所との調整サポート等を行う。

（4）　新たな体験活動事業の広報、啓発活動を行う。